



故宮所藏女性畫家 作品

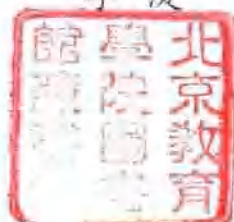
李 湜

紫禁城出版社



故宮所藏女性畫家 作品

李 湜



北京教育学院图书资料中心



0000147023

紫禁城出版社

439091

图书在版编目(CIP)数据

故宫藏女性画家作品 / 李湜编著; 马海轩译. — 北京: 紫禁城出版社, 2002.5

ISBN 7-80047-398-8

I. 故… II. ①李… ②马… III. 女性—中国画—艺术评论—中国—古代—日文 IV. J 212.05

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2002) 第 032042 号

故宮所蔵女性画家作品

李 滉

中国古代絵画歴史の中では、女性絵画はずっと男性がイニシアチブとする画壇の飾り物として存在していた。女性画家及びその作品については、絵画歴史著作の中では殆ど言及せず、ただ専門である書籍の中だけに彼女たちのことを簡単な記載が見られる。画蹟の角度から見ても、彼女たちの後世に伝わる作品は1000点に足らず、しかもその中の多くは明、清時代の作品である。

故宮博物院現在所蔵している古代女性画家の作品は約250点ある。その中の多くは代表的画家の代表作であり、これらの所蔵品を通じて中国古代女性絵画の基本的面目が大体覗かれる。

だが、これらの後世に伝わる作品より構築された女子絵画世界に入る前、ここでは一冊の本を言及すべきである。それは清代の学者であった湯漱玉が書かれた《玉台画史》である。中国初めての古代女性絵画史を紹介した本として、中国上古から清末期までの女子画家を「宮掖」（皇帝の配偶者）、名媛」（有名な令嬢）、「姫侍」（男性の配偶者）、名妓」の四種類に分けた。これは、古代女性絵画を知るのには大きく役立てること

になると思う。ただし湯氏の言う「宮掖」画家が残した作品はわずかであって、絵画創作の群体としては、実際の内容が欠け、また「名媛」、「姫侍」画家が、絵画伝承と技法表現上では、一致であるところが多いため、群体の構成と作品の表現特徴から見れば、古代女子画家は「閨秀画家」と「妓女画家」の二大創作主体に分けられる。

（一）閨秀画家

閨秀画家は「名媛」と「姫侍」画家を含み、平穩無事な暮らしをした家庭に育ち、詩や文章に通じる修養のある女子画家を指します。中には代代名門の人の画家もいた。特に画家名門の人の女子は、役人、商人家庭の人の女子とはずいぶん違った。役人、商人家庭の閨秀画家は、主に師に就いて絵の勉強をしたが、インテリ名門の閨秀画家は、幼いときから濃厚たるインテリ雰意気を満ちた環境の中で生活したため、時々絵を書く家族の人より指導を受け、また家に収蔵した書画作品を参考にすることができるので、その画技が役人、商人家庭の閨秀画家より高かった。

故宮博物院所蔵には、時代の一番早い女子画家の作品は、元代閨秀画家管道昇の《墨竹図》がある。これは、また落款のある一番古い作品でもある。管道昇（1262～1319）は、呉興（今浙江）の人。字は仲姬、瑤姬。号は栖賢山人。名書画家趙孟頫の妻であった。この《墨竹図》は、竹一本の枝先の部分を表現した絵である。竹の葉っぱがこんもりとしていて、重なり合って、葉っぱの「一葉一葉を一筆で描き出し、葉っぱの根元より落筆し、葉っぱの先の多くは、矢先を出して、力を入れて書き出し、軽く完成させる筆韻が読み取れる。



元 管道昇《墨竹図》（卷子）紙本 縦34cm 横57cm

この絵は管道昇の唯一の伝世作品でもあり、墨竹に対する表現は、彼女本人だけの取材の特徴を代表したのかもしれないが、閨秀画家の全体から見れば、彼女達が内容の表現においては、特に花鳥に熱中していたようである。花鳥画は目の前の情景に感動して、それを絵にしたり、対象物を通じて心を表したりする役割があるため、深閨にいる閨秀女子が優雅な庭園を書くと同時に、自分の生活の中でよく見かける花鳥には大きな創作の熱情を注いだ。したがって明、清時代には、花鳥画に長じる閨秀画家が多く現れた。

文俶（1595～1634）は、長洲（今江蘇蘇州）の人。字は端容。画家文從簡の娘であり、文徵明の玄孫であった。文徵明、文從簡の他に、親族である文彭、文嘉、文伯仁、文從昌も絵画で有名であった。文俶は



明 文徵《花卉図》（冊子）紙本 縦27.8cm 横42.8cm

幼い頃から「文家筆墨」の薫陶を受け、絵画に励み、ついに家伝に背かず、優れた成就を取められた。彼女が書いた花草、虫、蝶々等は、草木の形にしても、昆虫の表情にしても、何れも本物そっくりであって、生き生きとしている。故宮博物院所蔵の《罌粟湖石図》（軸）は、それぞれ違う物の状態の質的対比に特に力を入れ、花と湖石に「没骨」（線の無い）写意画であるが、湖石はすっきりとした大写意の手法で書き上げ、筆運びが雄勁で、墨が潤いであって、湖石の堅固の美しさを書き表している。花は工筆と写意を兼用して小写意で描き出し、筆法が細かく、色使いが典雅、そして綺麗であって、ケシのしなやかな美しさを現わしている。掛け軸《萱石図》は、冷暖色の対比を利用して、審美の味わいを強くした成功作である。色合いは、鮮やかな忘れ草と墨で染めた湖の石

明 文俶《罽華湖石
圖》（軸）紙本 縱
123.8cm 橫 61.3cm





明 文俶《萱石図》（軸）金箋紙本 縦
130cm 横42.9cm

によって、高度の冷暖色の色差をなしている。花の美しさと石のねばり強さはいずれもこの対比を通じていっそう鮮明になっている。明末の銭謙益が文俶に対し、「点染写生、自出新意、画家以為本朝独絶。」と極めて高く評価した。清代の張庚が、自分の著書《国朝画征筆録》の中で、文俶をより高く評価している。「吳中閨秀工丹青者、三百年来推文俶為独絶云」。故宮博物院所蔵文俶の作品には、《花蝶図》（扇面）、《罌粟蛱蝶図》（軸）、《梅花図》（扇面）、《石榴図》（扇面）、《花卉図》（冊子）など十点ほどある。

四 李因《荷鴛図》(軸) 絹本
縦130cm 横50cm

李因(1610～1685)は、錢塘(今浙江杭州)の人。字は今生。号は是庵、龕山逸史。光祿寺の少卿(宮廷の食事、宴会などを管理する部門の副長官)葛征奇の側室であつた。彼女は山水画も書けるし、花鳥も得意であつた。彼女の擬人的芸術手法によって創作された《荷鴛図》(軸)は、葛征奇と象徴される鴛が仏門浄土を意味する蓮の花の中を泳いでいる風景を描写した作品である。この絵には、彼女女性としての情趣を隠せず、強烈な感情が含まれている。清寶鑑が《国朝書画家筆録》の中で、彼女の花鳥画に対して「水墨

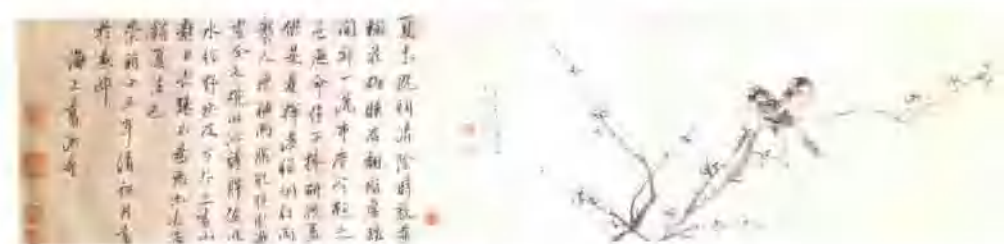




明 李因《花鳥圖》(卷子)(局部)(1) 絹本 全卷縱24.6cm 橫639.8cm



明 李因《花鳥圖》(卷子)(局部)(2)



明 李因《花鳥圖》(卷子)(局部)(3)

花鳥蒼古靜逸，頗得青藤（徐渭）、白陽（陳淳）遺意」と評価したことをこの《花鳥圖》（卷子）を通じて証明されている。作品は、運筆が力強く、弱々しさが無い。故宮博物院所蔵の李因の作品は、また《花卉圖》（扇面）、《月季圖》（扇面）、《菊石圖》（扇面）、《牡丹飛燕圖》（軸）など10点ほどある。

清 恽冰《紫霞朱帳図》
 (軸) 紙本 縦108cm
 横51.5cm

清代の恽冰は、字が清予。生没年不詳。清朝初期花鳥名画家恽寿平の後裔であつた。幼いときから花鳥画の創作に専念し、恽氏家族伝承の「写生正派」の画風を深く受け入れた。その花鳥画は真に迫って、写実的であり、造型が生き生きとしている。花びらには多く、墨を薄めて着色し、変化の多い運筆を通じて、墨色を画中の内容を完

紫霞朱帳
 清予
 恽冰
 作
 丁巳年
 清予





青柳述《南山佳色図》（軸）紙本 縦
106cm 横34cm

全に一体と融合させ、茎と枝、葉っぱの筋は熟達した運筆によって一筆で描き出し、立体感が非常に強い。彼女の作品は「着色は細かくて上手であり、日に向かう花には光が輝いている」と称された。《紫霞朱帳図》（軸）は、コウシンバラと紫藤が織りなし合う様子を表わした作品である。垂れ下がっている紫藤にしても、美しさを競うコウシンバラにしても、いずれも画面が清新であって、造型が写実的である。《南山佳色図》（軸）は、色彩が豊富で、冷暖色の組み合わせが整っている作品である。明るくて美しい色付けは、画面を華やかで快活な雰囲気溢れるようにしている。



清 馬荃《草虫花卉图》（扇面）紙本 縦17cm 横48cm

馬荃は、字が江香。生没年不詳。清の雍正と乾隆年間に活躍し、父親の馬元駒は、花鳥画が得意な画家であった。

彼女は、幼い時から父親と兄貴について絵画の理論的な勉強だけではなく、絵を書く練習も弛まなかった。それ故に“家学”、“緑窓学画”などの遊印を自ら作ったことがある。清の秦祖永が著した《桐陰論画》には、次のように記述されている。「馬江香荃、写意花卉、設色妍雅、姿態静逸、絶無点塵……只幅小品、筆意香艶、更饒優雅之趣」と。彼女は最後に「幻染法」（輪郭をとって染色する）に長じることで有名になり、江南の人たちは彼女と「没骨法」に長じる惲氷を絵画界の「双絶」（稀にない二人）と呼んでいた。馬荃の《草虫花卉图》（扇面）は、墨と緑色で描き染めた竹の葉には託された桃色の蓼花が一層格別に鮮やかである。その絵に書かれた蜂や蝶などの書き方も簡潔であって、造型も止



清 蒋季錫《倣恽寿平花卉图》（軸）紙本
縦107cm 横33.4cm

確であって、十分に馬荃の生き生きとした、趣のある描写の特色を表わしている。故宮博物院に所蔵されている馬荃の作品には、また《花鳥図》（卷子）、《花鳥草虫図》（冊子）がある。

清代の大学士、画家であつた蒋廷錫の妹蒋季錫は、江蘇常熟の人。字は蘋南、生没年不詳。博学の画家であつて、馬荃の「幻染法」を学び、恽寿平の「没骨法」も学んで、故宮博物院には、彼女の《倣恽寿平花卉图》（軸）が収蔵されている。また兄貴を通じて、西洋の明暗法を学び取った。その作品は、きちんと細かく、写実的で真に迫る審美的境地を求めた。故宮博物院に所蔵されている《花鳥図》（軸）は、彼女が多種類画法を一体に集めた代表作である。彼女はまず馬荃の「幻染法」を用いて、細かい筆運びで花の外側輪郭をとり、それが

らむらない色づけで量し、続いて揮氏の写生法を用い、葉っぱの受光の違いによって、それぞれ違う着色をした。中国歴代画家が表現した花木の中では、ライラックを素材にするのはめったになかった。蒋季錫は先人の作品を模写することに満足できず、素材の選択においては、独自の新しい境地を切り開いた。この新しい道を切り開こうとする勇氣は、女子画家の中にはめったになかった。蒋季錫はこの絵の中には、枝と葉っぱをうまく配置させ、構図の間隔の処理が優れていて、一段とライラックの清らかで美しいことを表わしている。



清 蒋季錫《丁香》(轴) 絹本
縦125.4cm 横66.2cm



清 蔣淑《豐盈和樂圖》（扇面）紙本 綾 19.5cm 横 58cm

蔣淑は、江蘇常熟の人。字は又文、生没年不詳。蔣廷錫の娘であって、幼いときからしつけられ、花鳥を書くのが得意であった。故宮博物院に所蔵されている彼女の《花卉図》（冊子）と、《豐盈和樂図》（扇面）は、いずれも父親の工筆と写実を結びつけた画法の影響をつよく受けたことを表わしている。

上記の絵画名門の閨秀画家のほかに、明、清時代には、また駱綺蘭、呉玖、呉応貞、王正、黄之淑、呉規臣、廖雲錦などの花鳥画が得意であった閨秀画家がいた。